

# 『春暖便り』 ～教育は人なり～

後志教育研修センター  
所長 長谷川 誠



大雪に見舞われた今年の冬も、ようやく終わりを告げ、春らしさを感じることができるようになりました。令和2年度の当センターの事業に対しまして、ご協力とご支援をいただき、誠にありがとうございました。今年度の研修講座受講者数は例年より減少していますが、感染症対策の関係で学校現場では大変な状況になっているにもかかわらず、多くの教職員が講座を受講し、研修に対して真摯に取り組む姿は非常に頼もしく感じました。このような教職員の意欲に忘れるべく、

コロナ禍の状況下においても、研修の灯火は絶やさないとこのセンターとしての使命を今一度深く認識したところであります。

研修講座の講義や開閉講式の挨拶を聞く真剣な眼差しから、若い先生方の熱心な姿を感じ取ることができました。その中で、どこか明日からの即戦力として使える指導技術的なものやhow to的なノウハウを求めているように見受けられたのは私の穿った見方でしょうか。日本の茶道や武道などの芸道・芸術における師弟関係のあり方の一つに『守・破・離』という教えがあります。

- 『守』・・・師に言われたこと、師の流儀・型を習い「守る」こと
- 『破』・・・師の流儀を極めた後に、他流も研究し、自分に合ったより良いと思われる型をつくり、既存の型を「破る」こと
- 『離』・・・自己の研究を集大成し、独自の境地を拓き、型から「離れる」こと

まさしく、教育においても同様のことが言えます。教育に携わる者は自分が納得いくまで追究し、苦勞して実践し、そして失敗しながら身につけていくものであると考えます。生活指導や教育相談、授業実践を通しての子どもへの接し方、それは教わるだけのものではなく、自身が体得することで一人前となっていきます。

人から聞いた指導法のみを追っているだけでは、自分の指導技術は一見成長したかのように見えますが、そこには本当の子どもの姿は見えていません。教育という営みは、最初に子どもの姿があります。子どもの側に立ち、子どもの要求や関心、興味といったものを教師の目で見直して、より望ましいと考える方向に導き、最終的にどうやって子どもの成長につなげていくのか。「子どもの側に立つ教育」これは忘れてはいけない教育の根幹であります。

〈『初霜だより』から〉

コロナ禍における令和時代の学校教育は、ICTが学びの一つの手段としてよりウエイトを占めてくるのは確実であります。しかしながら、どんなに科学技術が進歩しても、教育という営みが、人間が人間をより良い人間に育てていく営みである限り、教育する人間の人柄や能力・態度が教育をうける者に影響してくるのには否定できません。それは、教師の生き方そのものが子どもにとって鏡になるからです。学校教育の根底は「流行」にあるのではなく、「不易」にあると考えます。私達は今一度、原点に立ち返り、「教育は人なり」の言葉をしっかりとかみしめたいと思います。

〈『R3 研修講座開催要項 巻頭言』から〉

結びになりますが、当センターに3年間勤務されました村井ひろみ事務部長が今年度末をもって退任されます。センター運営に多大な貢献をされたことに感謝申し上げます、この後も健康に十分留意され、ご活躍されることを願っております。まもなく令和3年度の研修講座申込みがお手元に届くかと思われまします。「気軽・充実・役立つ」を合い言葉に、現場の実践に生きる研修講座を目指してまいりますので、新年度も奮って受講して下さいようお願い申し上げます。

(R3.3月)